「いただきます」に、感謝の気持ちを。

若手農家のグループ「４Ｈクラブ」の会長を務める宮寺裕輔さん。
全国的に後継者不足と言われるなか、生まれ育った三芳町で農家を継いだ想い、食への想いを伺いました。

後継者不足――。農林水産省の農業センサス調査によると、農業就業人口の平均年齢は約67歳、39歳以下の割合は全体のわずか7％。

日本では現在、高齢化と若者の農業離れが深刻な問題となっています。もし農業の担い手不足が続くと、食料自給率が減少し、海外の食料に頼らざるを得なく、食育への影響も少なくありません。

では、三芳町はどうでしょうか。今年で60周年を迎える「４Ｈクラブ」。町内在住の18歳から28歳までの農業に従事する若手農家の皆さんが集まる組織で、今年度は12人が所属し、町内の第2・3保育所の給食への食材提供や子どもたちが農業に触れ合う場「ちびっこ農園」を開いたり、朝市直売会を定期的に行うなど、地域に根付いた活動をしています。

「小さなころから一緒に遊んでいた仲間ばかりで楽しい」と話すのは、会長の上富の宮寺裕輔さん（27）。

学生時代、一度はサラリーマンになることも考えたそうですが、「小さな時から、父の背中を見て、野菜の収穫や箱詰めを手伝っていたこともあり、町の特産『さつまいも』を卒論のテーマにしました。研究を重ねるうちに、三芳町で農業を営むことへの想いが強まり、卒業後は農家を継ぐことを決意しました」。

日本農業遺産に登録された武蔵野の落ち葉堆肥農法。若手農家の多さ、つまり持続可能な農業が三芳町では出来ることも評価の一つとなりました。

「大学時代に地方から来た同級生の話を聞いてると、『なんて恵まれた町なんだろう』と痛感しました」と言う宮寺さん。

「三芳町は立地が良く、都会から近いことで、鮮度の良い野菜を早くかつ、運送費を抑えて届けられる。だから新鮮でおいしい野菜を、安く提供できる。差別化できることは大きな武器で、比較的リスクが少なく、やりがいを感じられるのは、魅力的」と農家を受け継ぐ立場から話します。

４Ｈクラブでの第2・3保育所への食材提供は、ふるさと三芳町の愛情醸成に繋がっています。「保護者から感謝の言葉をいただくことがあります。『身近なところで新鮮な野菜を食べられることは、当たり前ではなく、恵まれたこと』と。地場産を意識してもらうために、必ず給食のメニューに「三芳産」と書いてあり、地域に根付いた野菜や食への意識向上になっていると感じています。感謝されるとやりがいに繋がりますね」と話す宮寺さんは、小さな頃から「食」に触れることが食育に繋がると言います。

「農業体験などで、生産者と子どもたち、消費者との距離を縮めていくことで、食が身近なものとなります。地元で地場産の野菜が食べられることは幸せなこと。いただきますの意味、ごちそうさまの意味を考えて、一人でも多く「食」への『感謝』の気持ちが芽生えてほしいと思います」。■

❶産業祭に毎年出展している4Hクラブ。新鮮な野菜を低価格で提供。人だかりができるほど盛況で毎年完売しています。❷竹間沢小学校で、毎年行っているさつまいもの苗付けの様子。❸ウニクス川越で行われたにぎわいマルシェに出展。みよし野菜のPRも。❹ちびっこ農園に植える種を一人ひとりに丁寧に配る様子。

子どもフェスティバルに４Ｈクラブは毎年参加。今年はペットボトルボーリングを実施。

宮寺さんの畑で採れる主な野菜

４Ｈクラブの朝市直売会

若い力で作られた、三芳町の新鮮な野菜は、朝市直売会などでお求めいただけます。また、毎年11月に行われる産業祭では、トラックに積んだ新鮮な大根の直売が恒例となっています。今後の開催予定は下記の通りです。

◆6月9日㈯ みらい広場
◆7月7日㈯ 丸広 川越店「ふるさと埼玉朝市」